

前書き

^{ドミナント}主流社会の美点と欠点を浮き彫りにするため、アイヌ民族をはじめとする先住民族などのマイノリティがよく引き合いに出される。18世紀のフランスの知識人は当時の文明には欺瞞、偽善、悪事に堕落していることを憂え、高潔で無垢、純粋な「高貴な野生人」という理想人間像を夢想した。その反対に、文明の進歩を妨げる、蒙昧で幼稚、残忍で血に飢える「悪玉の野生人」のステレオタイプは並行して描かれていた。

アイヌ民族もそうしたイメージ操作の対象にされてきた近世から近代にかけて、アイヌ民族は開拓の邪魔者、教化しても真の「文明人」になり得ないように描かれていることが多かった。しかし、戦後の日本の高度成長にかげりが見え、環境破壊を憂慮する社会風潮が現れると、アイヌ民族は自然を大事にする共生の達人というイメージに変わった。

この特集は、アイヌ民族に関して創られ操作されてきたイメージをたどり、明治期以降、アイヌ民族の表象の背景にある政治的、文化的なイデオロギーを例証するために、「自然との共生」やジェンダー観、「北方論」の視点から、そして「アイヌ観光」資料や博物館での展示、小・中・高校の社会科教科書の記述を考査し、その成果を提示するものである。

児島論文は、自然との共生をことさらに強調されるアイヌ民族などの先住民族のイメージと、エコロジー運動との関係を取りあげ、近代以降におけるアイヌ民族などの先住民族のイメージと、エコロジー運動との関係を取りあげ、近代以降におけるアイヌ民族文化観の成立を論じている。また、アイヌ民族に関する研究では言及されることの少ないジェンダーを取り上げ、アイヌ民族の女性達は、伝統的な技術や作品を普及させ、アイヌの民族アイデンティティに重要な役割を果たしている事実を指摘する。

木名瀬論文は、1920年以降の日本帝国主義が確立していく過程で、内国植民地の北海道に住むアイヌ民族に対して行われた同化政策は、海外植民地の異民族政策の先行事例になったことを取り上げている。また、「北方」としての北海道は、日本でも植民地でもない日本国内の「異質」のアイヌ民族の同化が「完成」に向かいつつあるなかで、アイヌ民族をめぐるイメージの新たに展開する様相を探っている。

斎藤論文では、明治期にさかのぼって旅行雑誌などを渉猟して、ステレオタイプ化されたアイヌ文化、とくにその「原始」性が強調されていることを指摘されている。そうした資料を用いて、観光活動を通じたアイヌ文化の表象とエスニシティの表象に関する考察を行っている。

佐々木論文では、博物館での展示に関して、「博物館民俗学」の考え方に関する考察を通じて、アイヌ民族がどのように展示されているか、そして展示を見学する来館者の印象を調べた成果を報告されている。具体的には、北海道開拓記念館（札幌市）のアイヌ文化展示において、どのような人が展示を見たか、展示のなかで観覧者が新たに知ったことは何か、展示のメッセージがそれを制作した学芸員の意図通りに観覧者に伝わったかなどを知るために、展示の属性調査、観覧者調査を行った結果が示されている。

スチュアート／上野論文では、日本の社会科教科書におけるアイヌ民族に関する記述を分析するために、明治期から1990年代までの先行研究をまとめたあと、199年度検定教科書の記述を選出したデータと、1995年に行った同様の調査データとの比較考察を行った。その結果、1999年度の社会科教科書に登場するアイヌ民族に関する記述は充実しているが、「伝統文化」がまた強調されており、現状に関する記述が依然として不十分であることが示された。また、社会科教科書における先住民に関する日本とカナダの比較考察は、カナダに比べて日本の教科書の記述はあいかわらず「伝統文化」が強調され、現状についての情報はほとんど流通していないことが明らかになった。

この特集は、去年の2000年4月に作成した、平成10年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））による『アイヌをめぐる社会政治的状况に関する人類学的研究』（スチュアート ヘンリ代表、課題番号10610305）の研究成果報告集をもとに、修正・加筆を加えたものである。